『中部植民地、とくにニューヨーク植民地のアメリカ史における意義』

茨木慶三

はじめに

ニューヨーク市に関する最近の著書で、ある社会科学者は次のようにいった。「歴史は、あるいは恐らく歴史家は、ニューヨークを無視する。……好みによって、しかしまた、ある程度必然性から、アメリカは、自己のイメージや伝統を求めるに当ってニューヨーク以外の地（北部や南部）に目を向けてきた……」と。①

思うに、最も初期のアメリカ史家は、ニューイングランド（しばしばマサチュセッツと同意）やバージニア（その意味は広義）の地方主義の意識を反映した。彼らにとって、バージニア人こそが始めて、その特許状入手においてイギリス臣民の自由とコモンローを新大陸にもたらしたのであり、ニューイングランド人こそが何より、その後のアメリカの発展に神意によるとの色調を用意したのであった。② また独立達成後、最も初期の国民史で、バージニア人とニューイングランド人は一括して、新しい共和主義社会の真髄・原則の共通な祖先とみなされた。さらに後年、アメリカがより民族上多様化すればするほど、アングロサクソンのジェームズタウンやプリマスは、イギリス諸島以外からのヨーロッパ移民集団の流入に悩まされ、かつ、彼らに敵意をもった歴史家にとって、引きつけるものがあった。こうして史家にして移民制限同盟会長フィスク（John Fiske）にとっては、中部植民地の雑種住民は、彼の本来のアメリカ人の名簿では二流の地位しか占めなかった。③ くわえてその後、史家

ハンセン（Marcus L. Hansen）によって、移民研究が専門上一定の地位を占めたときでさえ、分析の焦点は中西部農村に植民した移民にあてられ、例えばニューヨーク市のゲットーに群居した人々に向けられなかった④。

以上のようにして、アメリカ史研究において、ニューイングランドとバージニアは多くの注目を受けてきた。確かに両者の役割は、配慮に値するものがあろう。しかしだからといって、中部植民地、なかんずくニューヨークをニグレクトしてよいであろうか。ここに筆者が、主としてニューヨーク史研究の泰斗クライン教授（Milton M. Klein）の所説に基づきつつ、本稿を発表するゆえんがある。

一

多くの史家が、中部植民地を無視した理由を指摘することは、それほど困難ではない。地図のうえで中部は明確に定められなかった。時々イギリス本国の行政官は、これらの地域とニューイングランドとを一丸として北部植民地と呼んだ。地図製作者も同様に、問題を混乱させた。例えばエバンス（Lewis Evans）は、彼の著名な一七五五年の地図で、中部植民地はバージニアからロードアイランドまでのすべてを含むものとして描いた⑤。これらの地域が物理的に限定できない以上、歴史家がこの地方について書くことができなかったとしても驚くにあたらない。

しかし、中部が無視されたのは地理的定義の不明確さだけに帰因するものではない。独立革命期のゴードン（William Gordon）から最近の史家ゼンセン（Merrill Jensen）に至るまで、アメリカ革命の研究家は等しく、中部が本国からの分離にふみ切った最後の植民地群であった点で意見が一致している。だが、そのような表面的事実に関しての意見一致は、それに伴って、なぜこれらの地域がそうしたかについての満足いく説明をもたらさなかった。確かに歴史家たちは、例えば、経済的繁栄、政治的不安定、大英帝国へのより深い密着が中部を躊躇させた要因のいくらかであったと示唆してきた。そのうえ一部史家は、中部におけるセクション感情が強情さの大なる理由であると暗示さえした。しかし未だ何人も、本当にセクション感情が実在したかどうか、また、それが中部の独立への姿勢を大いに潤色したのかどうかをみきわめるという観点で、同地における独立革命への道を探求してこなかった⑥。

実際多くの史家にとって、北部と南部を切断した四植民地（ニューヨーク、ニュージャージー、ペンシルベニア、デラウェア）は、何らかの集団的な意味において独特のものではなかった。この中間地帯は、政治上洗練され、また、活動的な二つのセクションの影にかくれた一種の緩

衝地帯と考えられてきた。時として史家は、むしろその存在を否定するためにこのエリアに注意を向けてきた。優れた中部植民地研究家の一人トルズ（Frederick Tolles）は、いささかフライドを傷つけられたと感じつつ、次のように注釈した。「いくらかの人々の心のなかに、中部大西洋地方が、北部と南部の間に残置されたものというのとは違った何らかの意味で、実存したかどうかの問題が生じるかも知れない[7]」と。

もう一人の中部専門家シュリヨック（Richard H. Shryock）は、中部は実在しないがゆえに史家がこの地方をニグレクトしてきたのか、それとも、史家がこの地方について書きそこなったために、この地方は考察の外におかれたのかどうかという問題を提起し、このエリアの住民は、不満をいだくことから生ずる一種の地域的自己意識を発展させてこなかった。このエリアは、学問の見地からいえば、長く「顧みられなかった地域[8]」であったと結論づけている。なるほど中部地方史には、『南部史の重荷[9]』＝根深い人種的有罪感と軍事的敗北意識＝に匹敵しうる何ものもなく、また、疎外された社会的エリートの苦悩に満ちた叫び＝北部の奴隷制廃止論者のそれ＝のようなものの何の形跡もない。中部は、その起源を思い起こす場合、最初の移住民が、頑固な意志ないし神の介在によって打ち克った飢餓のときの知識を参考にすることはできないであろう。また中部は、彼らの最も早期において、インディアンとのきびしい出会いという鍛造所のおかげで集団的特質を形成したということはできないであろう。さらに経済の面でいえば、ニューヨークやその近隣植民地は、革命期までに大きな繁栄を享受した。ある史家によれば、これらの植民地は、その社会的・文化的多様性と相俟ってこの繁栄のゆえに、北部や南部と対照的に、独立への決断をためらい、後二者は、その経済的運命を傷つけられたことによって、その社会的に同質な住民が受け入れることができた本国からの分離を、より急速に推進したのであった[10]。

ところで以下暫らく、中部のセクション的意識に関するニューエンシュヴァンダー教授（John A. Neuenschwander）の所説に耳を傾けたい。彼はまず次のようにいう。「（従来）、中部を非セクション的表現で考察する傾向が陳腐であったため、史家がセクション的特徴を探求する場合、他の地域を観察しようとしたのはもっともなことである。中部という術語は、地理的引用事項以上の何ものでもなかった。……中部は、北部や南部が経験したものに匹敵する地域的親近感や、防衛上の連帯感を発展させえなかった。しかしセクショナリズムは、単に北部や南部に言及するやり方だけでは精密に定義できない込み入った概念である。そのうえ、二十世紀におけるニューイングランドのセクションとしての意識の消滅は、重要な問題を提起する。すなわち、全国的な危機とアメリカ生活様式の大変化によって、他のセクションたる衝動が助長ないし滅ぼされたことがあったか？　換言すれば、アメリカ史のコースに大幅に影響したけれども、これまで認識されなかった事例があったか？　ということ

『中部植民地、とくにニューヨーク植民地のアメリカ史における意義』

が問題となる。……史家は、この問題の探求を怠ったのみならず、中部が一七七四～七六年の黙示的な年間に身につけたセクションとしての姿勢をみおとしてきた[11]」と。

ついで彼は、セクション発展を分析するために三段階説を案出していう。「第一段階は、共通のインタレストや目標についての直感的な感覚以上のものをほとんど含まない。もしこの感覚が内外から増強されつづけるならば、発端的なセクションとしての正体が形を作り始める。この第二段階において、現われつつあるセクションに特有ないくらかの傾向を莫然と暗示する術語が、折々に使用されるに至る。これらの初めの二つの段階には、そのエリア住民の少数の人々（＝エリート）だけが含まれる。……セクションの考えが抽象的概念として明確に陳述され、かつ、一般民衆がセクション的観点で考え始めるのは、第三段階までではない。遂にこの困難な第三段階に到達したとき、そのセクションは成熟するに至ったと思われる[12]」と。

こうして彼は、右のような発展が、第一回大陸会議召集時から一七七六年七月の独立宣言までに、中部で起こったと主張するために次のようにいう。「七四年九月までは十三植民地は、セクションとしての姿勢が容易に確認され、強化されうるところのそれにふさわしい組織あるいは統治機関をもっていなかった。各植民地の経歴・由来が様々であったから、本国はそれぞれの植民地を別々の行政的単位として取扱った。ただし、このような植民地際組織の欠如にもかかわらず、北部の四植民地は十分なセクションとしての意識に到達していた。……また南部セクションも急速に形を作りつつあった。……中部の四植民地からの代表だけが、何のセクション的結びつきなしに第一回大陸会議に参加した。（しかし）、このような外観にもかかわらず、今や彼らは明らかに、彼らに共通する社会的・経済的・政治的特質についての十分には表現されないけれども、直感的な感覚をもっていた。植民地が本国の政策と戦うべき方策を探求したその後の困難な月々において、中部リーダーは、二つの基本的な原則、すなわち、大英帝国を保持する必要とニューイングランドの膨張主義に抵抗する必要、この二点で自分たちが同意見であることに気づいた。ヤンキーは、右の二点で攻撃者であったがゆえに、中部の目からみれば主敵であった。ヤンキーが大英帝国を滅ぼし、ついで他の植民地を支配するに至るかも知れないと恐れて、中部リーダーは、急速にセクションとしての自覚という第二段階へ移行した。ここに彼らは、約十九ヶ月間、母国からの完全分離を回避するために激しい戦いを展開したが、結局不成功に終わった[13]」と。

右のニューエンシュヴァンダーの所説には、多くの解明不十分な点が残されている。例えば、明白なセクション的抽象概念が一般民衆に及ぶ

という彼の第三段階が説明されていない。また、中部と南部との間にある区別感情にはほとんどふれられていない。さらに、各植民地内部の党派と、それらのセクション的インタレストへの関係にもっと注目しなくてもよいのか、などの批判がなされるであろう。[14] しかし同教授が、コマンシャリズムと文化の多様性を中部の四植民地の共通点として、他のより同質的な地域と区別し、中部を単なる北部と南部の部分的重複とみずに、独特のセクションとして確立しようとした意図は、中部再評価の出発点として役立つであろう。

それはともかく、中部の役割の重要性を指摘せざるをえない。二十世紀が近づき、その同質的・農村的アルカディアが消失したときでさえ、理想郷を回想することを好んだアメリカ人が忘れがちであったことだが、アメリカの発展上重要な役割を演じたものは、中部の大都市とその数ケ国語を語る住民によって象徴される中部の都市的性格であった。もちろん、ニューヨークのような植民地が、原型として、十九世紀末まで存在してきた国家を象徴するというのは逆説とみえよう。アメリカの総体的性格の顕著な傾向の発祥地として、農村的な西部に国民の注意を他の誰よりも集中させた責任ある史家が、他方で、その傾向が中部に起源をもつと強調した人でもあったとなれば、逆説の程度はさらに高められよう。しかし実際ターナー博士（Frederick J. Turner）は、史家が今までその重要性にふさわしい注意をもって中部を研究してこなかったことを嘆いた。多様な社会・経済・宗教、タウン政治と郡政治の混合といったものを示す中部は、博士にとって、一八九二年のアメリカがそうであったところの「合成物」を象徴し、また、その思想や理想＝民主的・全国的で、気楽にして寛大であり、かつ極めて物質的な点、のうえで、「現代合衆国の典例」であった。[15] 中部は、その非イギリス性によって「典型的アメリカン」となりえたのであり、東と西、北部と南部の間を「仲裁した」のであり、また、博士が称讃したフロンティア人は、「他のどのセクションの人よりも中部人に酷似していた」のであった。[16] さらに中部は、「異なった意見への寛容さが宣言され、時の経過とともに、個人主義と社会的統制の欠如が、そのセクションの著しい特色となった」のである。[17]

ターナーの門弟ベッカー（Carl Becker）は、恩師のフロンティアテーゼと彼自身の植民地民主主義の都市起源説との調合にわずらわしさを感じたが、自己の研究対象の一つとしてニューヨークにスポットをあてた。しかし彼を除くターナーの門下の誰も、中部をとりあげることはなかった。こうして、「あらゆる普通人の土地」であると考えられるこの中部は、文学や歴史において、「無人の土地」となってしまったのである。[18]

ここにおいて、植民地時代史の総括を仕上げようとする今日の史家は、このように従来軽視されてきた中部の役割を十分に理解するように努め

『中部植民地、とくにニューヨーク植民地のアメリカ史における意義』

ねばなるまい。

二

ところで、ニューヨーク史の権威クラインは、次のように指摘している。「ブースティン（Daniel Boorstin）は、実際的順応という彼の基本的課題を、マサチュセッツ、バージニア、ペンシルベニア、ジョージアの経験に言及することによって説明している。しかしニューヨークは、その圧倒的に調和的な政治的・宗教的構造と、そのプラグマティックな社会および文化にもかかわらず取り立てて語られることがなかった」[19]と。省みるに、植民地時代や初期合衆国についての最初の史家たちは、大部分、南部にもふれた北部人であり、ピュリタンや最初のバージニア人の未知の野原や蛮族であるインディアンを征服した剛勇を誇り、また、S・アダムズ（Samuel Adams）やP・ヘンリィ（Patrick Henry）のような革命指導者、アレン（Ethan Allen）やワシントンのような独立戦争での軍事的英雄に憧憬をもってアメリカ史を書いた。さらに、ゴードンなど著名な各州の新共和国初期の史家や愛国的伝記作家は、当該地域のプリズムを通して国民の過去を眺めた。その結果、北部と南部が、自由の原則と革命精神の双生児の中心地として記念されたのである。これに対してニューヨークは、少くとも合衆国初期の市民が受入れる音調で賛歌を歌いえる同志をほとんどもたなかった。確かに同地植民地時代史はW・スミス・Jr（William Smith Jr.）によって、同地革命期史はジョーンズ（Thomas Jones）によって書かれた[20]。しかし両人ともロイヤリストであり、革命世代人やその後継者に魅力ある観点で書かなかったため、彼らの著書は軽視されがちであった。実際ニューヨークは、独立にふみ切ることを躊躇し、また、どこよりもロイヤリストを多く輩出したがゆえに、アメリカ人のなかでの評判は好ましいものではなかった。

その後の史家は、国民史を記録するうえで、より客観的で公平にして包括的であった。しかし、十九世紀末ないし二十世紀初めに来住した南・東ヨーロッパからの『新移民』の大群が在住したことが、彼らの国民経済への重要性にもかかわらず、史学界を支配したいわゆる『ワスプ』の感情を害し、多くの史家の関心をえることができなかった。そして、都会的・コスモポリタン的・商業的・多元発生的ニューヨークが、全体としての合衆国の風貌を帯びるに至った事実にもかかわらず、大部分のアメリカ人は、自分自身を都会的で産業化された人々とみるよりもむしろ、心理上、北部や南部の農村的過去というアルカディア的イメージに引っ込むことを好んだのであった。

なるほど、征服された植民地、そして王弟の領主植民地としてのニューヨークの創設は、愛国的心情を喚起したり、生来の情感を引き起こすことはほとんどできなかった。また、アメリカ国民の起源を、有力家族がリードしたものではなく、自由な人々の興起にあるとする史家が、いわゆる貴族的なマナ領主、大土地所有、半封建的小作制の存地したニューヨークを、生来の共和精神の例証としてとりあげることを避けたのも無理からぬことであろう。

しかし、植民地時代以来同地には、多くの点でのちの合衆国を予示するユニークな特質がみられたことを忘れてはならない。その多様な住民構成、教会と国家との調和、農商連合経済、芸術・科学・教育の奨励、形而上的文化よりもむしろ功利的文化への志向、社交的で様々なクラブ・酒場・友愛組織の存在などなど、色々な例をあげることができる。以下、初期ニューヨークがのちの合衆国の原型として貢献したと思われる重要な諸点を整理して指摘してみよう。

ⓐ雑多な住民

ニューヨークを軽視した史家さえ肯定した同植民地史の中核的事実、すなわち住民の異種性は、既にオランダ統治期に作り出されていた。一六四四年、同地を訪ねた一耶蘇会神父は、同地に十八種の言語が語られていると知って驚いた。イギリス領となってからも、同地住民の同質性を高めるために何もなされず、ためにこの多様性は変わらなかった。一七六〇年同地への一旅行家は、「様々な民族・言語・宗教が混在しているがゆえに、如何なる明確な、あるいは決定的な特徴を（同地住民に）与えることは不可能である」と述べた。[21] 革命期においても、住民はなお半分だけがイギリス人であり、ために同地は、北米での全英領のなかで最も多元起源の地であった。結局この多様性の帰結は、後代合衆国の場合同様、同地の宗教的・政治的・文化的生活のうえで甚大なものがあったのである。

ⓑ信教の自由

合衆国は、信仰の自由の評判をえている。しかしそれは、天与のものでもなければ、アメリカの最も初期の先祖に由来するものでもない。イギリス人は、宗教的正統派信仰と国教遵奉という既成理念をもって来米し、この遺産は、ニューイングランド・プロテスタンティズムによって大きく変えられることはなかった。ところが結局、宗教の自由が、拘束ではなくて社会的・経済的必要の結果として認められるわけだが、そのプロセスは、何処よりもニューヨークにおいて典型的に進展した。

『中部植民地、とくにニューヨーク植民地のアメリカ史における意義』

同地には、最初から宗教的多様性がみられた。例えば、オランダ統治期において、ユダヤ人は、そのオランダ西インド会社への投資と同社の通商拡大策のゆえに、滞在を許され、埋葬地権および安息日休業法と民兵奉仕からの免除をかちとった。[22] また、ロングアイランドのクェカーも、万人に神の恵みを与えるべきことを主張した現地（フラッシュイング）住民と、[23] 人口減少を恐れた本国アムステルダム株主団の支持をえて、総督スタイヴサント（Peter Stuyvesant）の不寛容政策に反駁することができた。イギリス領となってからも、指令された政策ではなくて環境のゆえに宗教上の寛容が実際的慣行であった。ヨーク公は、経済的必要から信仰上の寛容を許し、一六七四年オランダから再奪取後起草された八三年の『自由および特権の憲章』は、多数を成す住民が公立教会を設立できると同時に他の宗派もそれぞれの礼拝を行なってよいとした。[24] また九三年の『牧師条例』は、南部四郡で「十分に資格ある牧師」を公費で賄うことを定めたが、この条例を国教会への独占的恩典との解釈は、非国教徒によって激しく反対された。ロシター（Clinton Rossiter）が指摘したように、「この条例が公立教会設置を意味したとしても、どの教会が公立なのか何人も確かではなかった」のである。[25]

ニューヨーク植民地で発展したのは、明確な教会と国家との分離でもなければ、はっきりした公立教会の設置でもなかった。しかし、非国教徒が多数を占めた社会では、九三年の『条例』は、非国教徒の牧師への公費支給を認めるものとの解釈も可能であった。宗教的多様性の最も著しいニューヨーク市では、任意の寄付に基づく教会維持の原則が奉ぜられる結果となった。国教会やオランダ改革派教会の牧師は、「公共の平和を乱さないかぎり、自己の正しいと考えることができたところの良心の完全な自由」から生じた宗教的「錯乱の傾向」を嘆かねばならなかった。とはいえ他の人々からみれば、「多様な宗教こそ、他人への人の専制・侵害に対する防壁」であった。要するに、ジェファーソンが、国家による宗教支配の市民の平安に対する危険の恐れを表明するずっと前に、ニューヨーク人は、様々な社会での日常生活のるつぼのなかで、各派教義に市民の霊的愛着を求めて競い合わせる宗教上中立な国家が如何に価値あるものかを学んでいた。同地では、このような競争が、無神論ではなくて自由を強化し、宗教上の自由という「生来の権利」が、政治的理論ではなくて長い経験によって維持された。[26] そして、偏見や宗教上の相互疑惑は、調節によって払拭されず、ニューヨーク市では長老派と国教徒が、モホーク渓谷ではドイツ人とオランダ人が、互いに不信の目で相手をみたけれども、国家が、神への愛を、調和さえも、生み出すことを期待されることはなかった。国家の役割は、自己自身の正統派的信仰を他人に強制することでも、また、いずれかの宗派がそうしようとするのを許すことでもなかった。宗教問題での国家の支配権は、宗派の見解

が「社会に有害な行為」に転化されたときのみ道理にかなうとされ、しかもその際罰すべきものは、宗派の見解ではなくて行為であった。[27] こうしてニューヨーク植民地は、多様性は宗教的闘争と不道徳を招来するだけだという議論が誤りであることを示す典例を、隣接植民地に提供しつつ建国された共和国にくわわったのであった。

ⓒ黒人への不信感

とはいえ、同地における寛容の精神は、他の植民地やのちの合衆国同様、限界があった。それは、ニグロがかかわるところで明白である。同地の奴隷身分は、オランダ統治期には、イギリス統治期においてよりも人間的であり、明確なニグロ奴隷の制度化は発展しなかった。しかし、イギリス支配下で奴隷身分が拡大したため、同地には南部を除くどの植民地よりも多数の奴隷が存在し、また奴隷の増加に伴って、ニグロに対する最も過酷な暴行がみられることとなった。例えば、一七一二年、放火して白人を殺したニグロへの報復は身の毛のよだつもの（火あぶり、断食死、車裂きなど）であった。また一七四一年、でっちあげられた「ニグロの陰謀」という噂のため幾人かのニグロが処刑されたが、このときの残忍さは、約半世紀前のサーレムの魔女狩りに匹敵するものであった。[28]

しかし、人種暴行に関して手本であるのは、処罰の厳格さよりもむしろ白人住民の錯乱である。ニューヨーク白人は、生活手段として四海同胞主義を学んでいたが、この調合図式にニグロを適合させようとはしなかった。彼らは、多様性の夢を皮膚の色の区別を越えて拡大することを望まず、またできずに、のちの世紀により周知となる論理的根拠でもって対応した。すなわち、この地の奴隷は「極めて寛大」に取り扱われ、ヨーロッパの貧民よりもよりよく世話されてきた。下劣な陰謀に参加したニグロは例外であり、その「無分別」で「横しまな企て」は、悪魔による煽動に帰因したのだというわけである。[29] 二十世紀においてさえ、北部都市の四海同胞主義は人種差別否定を意味しなかった。植民地時代ニューヨークは、この国民的病弊を象徴したといいえよう。

もちろんより好ましい点もあった。同地の奴隷は、大土地において団を組んでではなく、様々な職種の手工業や商業、および家事で使用され、その程度まで運命を改善し、技能を修得して解放されることも可能であった。しかし植民地時代の同地の欠点は、他植民地同様、ニグロの才能の啓発を怠ったことではなく、奴隷身分終了後、彼らの才能を用いる用意をしなかったことにあったのである。

ⓓ文化上の模範

『中部植民地、とくにニューヨーク植民地のアメリカ史における意義』

以上述べてきた他に、ニューヨークが十三植民地におけるアメリカの原型とされる証拠は枚挙に遑がない。ともかく十八世紀には、ニューヨークはアメリカの象徴という印象をもたれた。例えば、アメリカ各地を遍歴したフランス人クレーヴクール(Michel Guillaume Jean de Crèvecoeur)が「アメリカ人とは何ぞや」の問題を提起したとき、なお約七五パーセントがイギリス人であった国民に対して自ら与えた解答は、「彼らは、イギリス人、スコットランド人、アイルランド人、フランス人、オランダ人、ドイツ人、スウェーデン人の混合物である」というのであった。[30] 彼は、ニューヨーク植民地のオレンジ郡での観察によって、同地で出会った「新しい人間」を材料として、より広義のアメリカ人のイメージを作り上げたのである。彼の印象の誤った点は、純然たる無知の結果であったとしても、ニューヨークがより大なるアメリカのイメージを示すと考えられたことは興味あることである。

同地は、多くの点でアメリカの最初のものであることを誇ることができた。公費で維持された最初の学校、政府の賛助なしに組織された最初の商業会議所、アメリカで書かれ印刷された最初の戯曲、最初の医師免許、最初の議会議事録の印刷など。また同地には、二番、三番目のものも多い。確かに「金もうけの術」が急務とされ、コールデン代理総督(Cadwallader Colden)が考えたように、それが「青年層に普及した唯一の生活原則」であったため、文化は同地の得意ではなかった。しかし同地は、フィラデルフィアについで『有益な知識の促進のための会』を開設し、公立図書館を運営し、病院や医学校を設立し、またボストンについで医師会を発足させ、法律専門討論会を作った。その他、公的教育管理の実現を目ざしたキングスカレッジの創設や、全植民地の新聞のなかで最も陽気で論争的な政治記事を掲載した新聞の発行などもあげられよう。[31]

なお注目すべき点は、中部植民地の出版物が、その内容において政治、法律、神学、教育、社会科学、文学など各分野に均衡が保たれており、南部のそれの半分以上が条例、法令、行政上の布告を含み、北部のそれが神学的にすぎたのと対照的であったことである。[32]

ⓔ大英帝国のかなめ

植民地時代ニューヨークの経済状態は、北部や南部と比較して、単一な重要産物や産業に依存することが少なく、より多様で、より安定していた。第一に同地農業は、交易従事者を扶養するのに役立つために不毛な土地から作物を無理に引き出すいわば補助的な活動ではなく、むしろ交易と組合わされており、ニューヨーク市が農場生産物の販路を用意したのであった。次に同地の紙幣は、よりよく管理され、濫発されること

が少なかった。第三に同地の貿易は、南部のそれが双務的であり、北部のそれが三角貿易ハターンであったのと対照的に、一部は三角貿易であるが、より主にはヨーロッパとの直接交易であった。[33] 思えば、以上の点が、革命期における同地の繁栄の源であり、本国に対して刃を抜くのを躊躇したゆえんである。

ところで、七年戦争によって同地は、いわば大英帝国軍の大本営の地として、その経済に最大の活況を提供された。しかし戦争は、植民地および大英帝国の構成上における同地の戦略的・外交的重要性を一層きわだたせた。実際同地は帝国のかなめであり、全植民地時代にわたってイギリス正規軍が駐屯した唯一の植民地であった。なるほど、駐屯した四独立中隊は極めて軽くみられはした。しかしその駐留そのものが、同地および同地のイロコイ族との同盟の戦略的重要性を本国政府が認識した象徴であった。[34] イギリスとフランスとの張り合いが、十八世紀の間に経続してなされたのはニューヨーク・フロンティアにおいてであり、イギリスが、帝国を強化し、それを母国と植民地の共同利益とするための助言をくり返えして受け取ったのは、コールデンらニューヨークの好戦的帝国愛好者からであった。また、植民地ユニオンを作ろうという極めて重要な計画が支持されたのが、ニューヨークにおいてであったことも意義深い。なおまた、北アメリカにおけるイギリス郵政部が、十三植民地での動きに関する情報を早く、かつたびたび国王に提供するために、その本拠地を設置し、一七五五年にイギリスからの郵便船業務を開始したのも、帝国の戦略的中心地であったニューヨークにおいてであったこともゆえなしとしない。[35]

(f)政治上の原型

クライン教授はいう。「植民地時代ニューヨークが、明白にアメリカ発展史上の最も重要なテーマを示すのは、政治の領域であった」と。[36] 確かに、初期ニューヨークの政治構造や、それによって政治が作用したところのメカニズムの性格については、今日なお議論中である。しかし、いくらかの結論は、最も議論好きな史家といえども受け入れるであろう。

同地には、植民地産のアリストクラッツの単純なオリガーキイとか、政治的に無告の大衆とか、民主主義者と貴族主義者、ないしは保守派と急進派との間で明白に識別できる衝突とかが存在したと簡単に断定してよいであろうか。むしろ、後代の政治舞台でみられるものの、複雑で、ダイナミックな、一部は技巧をこらした前兆が現われていたといえるかも知れない。ともかく同地の政治的党派は、経済の異種混交、雑多な民族的・宗教的構成、地理的セクショナリズム、および社会構造を反映したものであった。政治的党派といっても、それは幅広い提携であり、必

『中部植民地、とくにニューヨーク植民地のアメリカ史における意義』

然的に綱領は、しばしば様々な言語で述べられ、コスモポリタン的住民に訴えるに足るだけの拡散したものであった。そこには、エリートへの畏敬の念があったとしても、また民主主義が存した。アリストクラシィがあったとしても、また公共に対する責任感が存した。大家族間の対抗があったとしても、また民衆による討論が存した。地方的関心があったとしても、またアングロ・アメリカンの利害関係への関心が存した。社会的階層化や官職保有の独占があったとしても、また流動性やかなりの程度の官職交代が存した。本国から移入されたホイッグ理論があったとしても、また、植民地の特殊な政治的ダイナミックに適合するように、植民地政治家によって示されたこのうえなくアメリカ独特の表現方式が存した。発言力のある人々が保守主義や身分の代弁者であったとしても、また、無口な自由と平等の信者が存したのである。

同地には、確かに、誰が内部で支配すべきかをめぐる抗争が存在していた。しかし、誰が論争者であったのか。また、彼らは何を欲したのか。さらに、彼らは常に同一人物であり、かつ、その目的は一貫していたのか。これらの問題に対して、今日明確な解答が求められている。ともあれニューヨーク人は、既に植民地時代において、状勢がのちのアメリカが演ずるように命じ、また、未来のアメリカが予期するに至ったところのスタイルで、政治劇を演ずることを学びとっていた。彼らは、植民地の貴族的傾向にもかかわらず、本能的に民主的であることを学んでいたのである。この点を理解するにあたって、十八世紀のイギリス政治に関するプルム(John H. Plumb)の鋭い観察＝イギリスの政治は、「政治制度のオリガーキイ的性格によって人が信ずるに至るよりも、常に、より豊かで、より自由で、より開放的であった＝が役立つであろう。当時は、参政権や選挙さえもが政治的関心の核心ではなかった。しかしそれらは、決議作成や騒乱を惹起し、政治意識を着実に成長させたのであった。[37] 植民地時代ニューヨークの経験は、右の主張が有効であることを示している。すなわち同地人は、一七七五年までに、アメリカがのちの年間に精通したことに慣れていた。非ニューヨーク人だけが、革命期のニューヨーク市では、「男も、女も、子供も、すべての身分・職業の人々が政治に狂っていた」と聞いて驚いたのである。[38]

おわりに

以上要するに、アメリカの特徴の起源を探求する史家は、中部植民地、とくに初期ニューヨークの役割を認識して然るべきであり、従来ニグレクトされてきた初期ニューヨーク史の研究を重視しなければなるまい。素人史家T・ローズベルト(Theodore Roosevelt)大統領は、次のよ

らにいっているが，ニューヨーク史研究の必要性を示唆した点で先見の明があったといえよう。彼はいう。「ニューヨーク市史によって教えられる最も重要な教訓は，アメリカニズムという教えである」と[39]。

註

① Nathan Glazer and Daniel P. Moynihan, Beyond the Melting Pot (1963), 2.
② Wesley F. Craven, The Legend of the Founding Fathers (1956), chap. 1.
③ Edward N. Saveth, American Historians and European Immigrants 1875-1925 (1948), 34-40 in Milton M. Klein, "New York in the American Colonies : A New Look", *New York History*, LIII (1972), 135.
④ Allan H. Spear, "Marcus Lee Hansen and the Historiography of Immigration", *Wisconsin Magazine of History*, XLIV (1961), 266.
⑤ Lewis Evans, General Map of the Middle British Colonies in America (1755).
⑥ John A. Neuenschwander, The Middle Colonies and the Coming of the American Revolution (1973), 4.
⑦ Frederick B. Tolles, "The Historians of the Middle Colonies", in Ray A. Billington ed., The Reinterpretation of Early American History (1966), 65.
⑧ Richard H. Shryock, "The Middle Atlantic Area in American History", *Proceedings of the American Philosophical Society*, CVIII (1964), 147-155.
⑨ C. Van Woodward, The Burden of Southern History (1960).
⑩ Cf. John M. Head, A Time to Rend (1967), xiii-xiv.
⑪ Neuenschwander, op. cit., 5-6.
⑫ Ibid., 6.
⑬ Ibid., 7-8.
⑭ ニューエンシュヴァンダーの批判については次をみよ。*New York History*, LVI (1975), 240-1 ; *William and Mary Quarterly*, XXXII (1975), 146-7 ; *Journal of American History*, LXI (1975), 1083-4.
⑮ Frederick J. Turner, "Problems in American History" (1892), in Everett. E. Edwards comp., The Early Writings of F.J. Turner (1938), 78-9.
⑯ do, "The Significance of the Frontier in American History" (1893), in Edwards, op. cit., 217-8.
⑰ do, "The Development of American Society" (1908), in Wilbur R. Jacobs ed., F.J. Turner's Legacy : Unpublisched Writings in American History (1965), 177.
⑱ David Ellis, "New York and Middle Atlantic Regionalism", *New York History*, XXXV (1954), 5.

⑲ Klein, "New York in the American Colonies : A New Look", 140.

⑳ William Smith Jr., The History of the Late Province of New York, from Its Discovery to the Appointment of Governor Colden in 1972, 2vols. (1829) ; Thomas Jones, History of New York during the Revolutionary War, 2vols., ed. by Edwin F. DeLancey (1879).

㉑ Edmund B. O' Callaghan ed., Documentary History of the State of New York (1849-51), IV, 21.

㉒ Henry H. Kessler and Eugene Rachlis, Peter Stuyvesant and His New Yopk (1959), 179-86.

㉓ O' Callaghan ed., Documents Relative to the Colonial History of the State of New York (1856-83), XIV, 402-3.

㉔ David S. Lovejoy, "Equality and Empire : The New York Charter of Libertys, 1683", *William and Mary Quarterly*, XXI (1964), 505-6.

㉕ Clinton Rossiter,"The Shaping of American Tradition", *William and Mary Quarterly*, XI (1954), 522.

㉖ Cf. Perry Miller, "The Contribution of the Protestant Churches to Religious Liberty in Colonial America," *Church History*, IV (1935), 57-66.

㉗ Klein ed., The Independent Reflector by William Livingston and others, 94, 308.

㉘ Joel Tyler Headley, The Great Riots of New York 1712-1873 (1970 riprint), chap. II ; Winthrop D. Jordan, White over Black : American Attitudes toward the Negro, 1550-1812 (1968), 115-8 ; Thomas J. Davis ed., The New York Conspiracy by Daniel Horsmanden (1971), appendix.

㉙ Davis, op. cit., 105-6, 168.

㉚ J. Hector St. John de Crēvecoeur, Letters from an American Farmer (1951 reprint), 41, 43.

㉛ Klein, "New York in the American Colonies : A New Look", 149-52.

㉜ Alexander C. Flick, History of the State of New York (1933-37), III, 84-6.

㉝ Thomas C. Cochran, "The Middle Atlantic Area in the Economic History of the United States", *Proceedings of the American Philosophical Society*, CVIII (1964), 156-7 ; Roger W. Weiss, "The Issue of Paper Money in the American Colonies, 1720-74", *Journal of Economic History* XXX (1970), 777, 780 ; William I. Davisson and Lawrence J. Bradley, New York Maritime Trade : Ship Voyage Patterns, 1715-65", *New York Historical Society Quarterly*, LV (1971), 309-17.

㉞ Lawrence H. Leder ed., "Dam'me Don't Stir a Man : Trial of New York Mutineers in 1700", *New York Historical Society Quarterly*, XLII (1958), 261-83.

㉟ Cf. Max Savelle and Margaret Anne Fisher, Origins of American Diplomacy : Angloamerica, 1492-1763 (1967), 179-90, 511-54.

㊱ Klein, New York in the American Revolution, A Bibliography (1974), xii.

㊲ John H. Plumb, "Political Man" in Janes L. Clifford, ed., Man versus Society in Eighteenth-Century Britain (1968), 21.

㊳ Klein, "New York in the American Colonies : A New Look", 156.

㊴ Theodore Roosevelt, New York (1891), xi.